ぼくの小さな祖国

胡桃沢耕史

ぼくの小さな祖国

胡桃沢耕史

胡桃沢耕史（くるみざわ　こうし）
本名清水正二郎。大正14年東京に生まれる。拓大卒。「近代説話」同人として文筆活動，『壮士再び帰らず』でオール読物新人杯を受賞。近著「旅人よ」で昭和56年上期直木賞候補となる。

ぼくの小さな祖国

昭和57年3月25日　1刷

定価　一二〇〇円

著者　胡桃沢耕史

発行者　清水大三郎

発行所　株式会社　サンケイ出版
東京都千代田区大手町一の七の二（〒100）
TEL（東京）二三二一七一一一（代）
大阪市北区梅田二の四の九（〒530）
TEL（大阪）三四三一一二二一（代）

印刷　サンケイ総合印刷

製本　田中製本

＊万一、乱丁落丁の場合はお取替えいたします

© 胡桃沢耕史 1982 Printed in Japan.　0093—822130—2756　〈検印省略〉

目次

序章 ―― 五
第一章 サンパウロ ―― 一六
おれ 一六
ぼく 三〇
私 五一
間章 その1 ―― 七六
第二章 三つの家系 ―― 八六
カルメン 八六

ジョン　一〇六
ロドリゲス　一二九
間　章　その2――――――――一四〇
第三章　国境へ――――――――一四七
おれ　一四七
ぼく　一五〇
私　一五九
おれ　一六六
私　一八六
ぼく　二一五
私　二二四
終　章――――――――二三二

カバーイラスト／篠田昌三　装幀／太田徹也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぼくの小さな祖国／胡桃沢耕史

序章

一九七九年の一年間の大部分を、ぼくは中南米の諸国を歩き回っていた。

そのころも、今でもそうであるが、殆ど作品が売れない、貧しい無名の作家であるぼくには、贅沢な観光旅行をする経済的余裕などはなかったのだが、その代りどこからも期日を切った注文もなかったので、自分の持ち時間だけはいつもたっぷりあった。

だが、その旅行は、将来の飛躍に備えての取材旅行というほど大げさな気張ったものではなかった。

実はいつのまにかぼくももう還暦に近くなり、未来が殆ど残っていないのに、ある日愕然として気がついたのだ。その意味では時間だって、本当はたっぷりあるとはいえないのかもしれない。人間は先のことが分らないから、自分一人でそう思っているだけで、老いは目前であり、死はその先にちゃんと待っている。急がなくては何もしないままで一生を終ってしまう。駆りたてられるような思いで未知の国々を歩き回った。だからその旅行に最もふさわしいのは、放浪という言葉だったろう。三十代の僅かの期間多少の虚名を得たぼくは、当時機械のように書きまくった、沢山の下品な書物の版権をまとめて版元に二束三文で叩き売って、やっと僅かな金を作り、家族とも、もう二度と会うことは

ないだろうと、心に決めての旅の日だった。

帰る日のことなどは、出発のときには考えてもいなかった。

その年、一九七九年度に於ては、中南米を全部合せると、二十七カ国の独立国家があった。ヨーロッパやアジアの諸国に比べると、この二十七カ国の歴史は皆新しい。どこの国でもまだ地殻が固まっていない変動期の苦痛を見せていた。必ずどこかで内戦があり、革命騒ぎが起っていた。ぼくが歩いているときだけでも、二度も政権が変る内戦にぶつかり、暴動や小規模のクーデター鎮圧の軍隊の出動、首都の戒厳令下での非常線検問などに直面したことは数えきれないほどあった。

実はぼく自身、理由も分らぬままに、投獄されたことも、二度ほどある。

たしかに、革命などというものは、この中南米では日常の出来事であったとしても、外の世界の人間にとっては、一生のうちに見ることができるかどうかの、珍しい大事件だ。

興味がないわけではないが、だからといって、旅人の身としては偶然に現場に直面してみれば、ただ不安で恐ろしいだけである。当事者でなければ、どちらが勝っても昂奮のしようもない。それよりやはり我が身の安全が大事だ。痛い思いはしたくない。

いつどこへ行ってもかまわない旅程であったから、できるだけそういう状況が起りそうな場所は避けたつもりである。こうして歩いているうちに一年に近くなった。さすがにこの長い月日は初老の体には、応えてきた。それまでは全くといっていいほど、感じることのなかった帰郷への思いも、一年目を迎えるころには、しきりに湧いてくるようになった。故郷を思う気の弱りを感じてきたら、もう旅も楽しくない。そろそろこの放浪ともいってよい月日を終りにしようと考え、ぼくは最後の目的地のアルゼンチンまでバスを乗り継いで一気に南下した。

大正生まれ、昭和の二十年の終戦より前と、その直後の五、六年の混乱期に、青春の時代を送った

人々には、タンゴという名の、四分の二拍子の、馬が蹄を蹴立てて歩くような、歯切れのいいリズムを持ちながら、同時に色濃い哀愁を漂わせているアルゼンチン特産の音楽は、非常に懐かしいものである。

当時の青年層にとっては、現代のロックにも似た新鮮な音楽であり、同時に年寄りには眉をひそめられた、忙しくてやかましいだけの音楽でもあった。いやがられながら聞くことは、当時でも今でも若者の反抗をあらわにした特権でもあった。

そんなタンゴも今は、アルゼンチンにだけ残っている古いリズムになってしまった。それも、当のアルゼンチンでもヴェノスアイレスの町の、一部の場所に固まってある、小さな酒場にだけ古典芸能の扱いで残されていて、愛好者だけが集まって聞くものになっているという。一般の青年子女には縁のない音楽であるらしい。それでも聞きたかった。

ヴェノスアイレスには十一月になるころ、ぼくは入った。南半球ではこれから夏に入ろうとする季節で、古いヨーロッパがそのまま残っているという街は、初夏のさわやかな匂いで一杯であった。だがタンゴはその街の市街地区の中ではやはり全く聞くことができなかった。場末にある河船の往来する港のそばに、それらの古いタンゴを聞かせる酒場がいくつかあった。港町の安宿に泊って、しばらくそんな酒場に通っているうちに、ぼくは珍しいことを知った。

港のあたりに住む人々はある特有の気風を持っていた。別にアルゼンチン政府にたてつく意図はさらさらないらしいのだが、自分たちで、港の一画を、別な独立国として、ちゃんと大統領をたて、別な政府をおいていた。

大統領の胸には、大きな木釘の模型を吊し、その象徴としていた。彼らは自分たちの国を木釘（ボカ）共和国と呼んでいた。

すべてが、おふざけの精神であったが、それだけに粋でもあった。ぼくはそこに半月以上も足を止めて、毎日夕方になると起きて安酒場に行き、夜明けまで、地元の生っ粋のタンゴ音楽にひたるという生活に溺れこんでいた。帰郷へのあの胸がつかれるような思いは、急に薄くなっていた。

酒場にやってくる、髪の毛の黒い、瞳の黒くて大きいアルゼンチン娘にチップを少しやって二人で踊るタンゴは、今のぼくには、息切れするほどに激しかったが、戦争・戦後の飢えと混乱と、必ずしも快適ではなかった青春時代を、久しぶりに懐かしく思い出させてくれるものがあった。

通いだして五日目ぐらいのころだろうか。近くの席で楽しそうに飲んでいた老人が、帰りがけに立ち上がるとぼくの席までわざわざ来て、日本語で話しかけた。

「ツーリスタの方ですかのう。これ今日サンパウロから送ってきた日本語の新聞ですたい。わしはもう読みましたから、よかったら持って行かんですかの」

突然の日本語でびっくりした。その老人はもう何十年もこの土地にいる人とすぐ分った。陽に灼けた皮膚、ささくれだった手、何よりも首の回りにある深い皺が、彼がこれまで過ごしてきた人生を語っていた。

「どうもすみません。ずっと日本のニュースを聞いていませんので助かります」

「いやそれには、日本のニュースは、殆ど載っていませんたい。ブラジルの新聞ですからの。でも、今日の分は、面白いことが、ようけのってます。この河の上の方に小さい国がありましてのう、そこに日系の大蔵大臣がおるですたい。その大臣は、もし南米諸国の中に日系の大統領が出るとしたら、まずその人が一番早かと皆に思われておったんですでの。わしら日系人はこの南米でお互いに住む国はそれぞれ違うとるが、こぞって応援していたんですがのう。何とその人が一週間ほど前、国庫の金洗いざらい持って逃亡したのが最近になって当のその国から告発されて明るみに出たという記事ですた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い。黙っていれば、国全部が、もう十年もしないうちには、自分の手の中に転がりこんでくるというのに、何でそんなことをしたのかと思うとるですたい。まあー、あんたが見てもきっと面白かですよ、読んでみるがよかとね」

「そうですか、ありがとう。珍しい事件ですね」

ぼくにはむしろ、久しぶりに日本語で話ができるのが嬉しかった。彼の手から、

『サンパウロ時報』

という新聞を受け取ってちらりと見た。題字のすぐ横に、二人の男の写真がのっており、」

〝奇怪……国大蔵大臣、突然失踪

貿易収入約百万ドルを拐帯

国内政争のもつれか！〟

と大きい活字の見出しが出ていた。

「これいただけますか」

賑やかなタンゴの音楽の中で読むにはふさわしくない。それに視力も衰えていて、酒場の暗い灯の下では、小さな活字は読めなかった。それでもう一度断って持って帰ることにした。

「どうぞ、どうぞ。持って帰ってゆっくり見たらよかですたい」

日系の老人はいった。

ぼくはその夜おそく安宿へ戻ると、久しぶりに日本語の新聞を読んだ。活字の素材を作ることを職業とするぼくにとっては、事件のことよりも、日本の字の新聞を読むということの方が、久しぶりの乾きが癒されたような感じで嬉しかった。

文章は、現在の日本のジャーナリズムの世界では、あまり見られない古風なはずみがついたもので、

使われている漢字も言い回しも、何十年ぶりかに見るようなものが交っていて、なかなか面白かった。
内容としては、その大蔵大臣が日系で、南米同胞のすべてから期待されているという人だということ以外は、事件のことは殆ど、ぼくの記憶には残らなかった。
中南米では小国の内乱騒ぎは、どこでもありきたりの話であったし、移民ではない、旅人(クリーステ)としては全く利害関係のない騒ぎであったからだ。
ポカ共和国の雰囲気とバンドネオンの甘い音にすっかり溺れてしまったぼくは、この旅の最後の骨休めに、体ごと沈澱するようにして、この町に居続けた。同じ酒場でもう一度ぼくがあの日系の皺の深い老人に会ったのは、それから十日後であった。
「やあ、この間は新聞すみませんでした」
ぼくが声をかけると向うも懐かしそうに近よってきた。
「まだご滞在でしたかの。よっぽど、このポカがお気に入りのようですの」
彼はぼくの横に坐りこむと、やがてこちらが聞きもしないのに、自分がこの国へ入って来てからの話をした。移民は誰でも、それ相応の苦労をしてきていて、その苦労話をきかせるのが老後の唯一の楽しみになっている。これは二十カ国を越す国を回って、すべて同じだった。しばらくはつきあってやるのも、同じ日本人としての旅人の義務だと思った。その代り酒はひっきりなしに注文して飲ましてくれる。
老人はアルゼンチンの日系人の社会では一番多い、花畑の持ち主で、まあまあの成功を納めているらしかった。三十分ぐらいで、一通りの奮闘努力話が終ってから、ピーノ(葡萄酒)の酔いに陶然としてきて、ますますおしゃべりになってきた老人は先天的に聞き上手のところのあるぼくと別れにくくなったのか、急に思い出したようにいった。

「どうです。あんた、わしと一緒に、明日からラ・プラタ河を三日ばかり溯っての旅をしてみませんかの」
「何かあるのですか」
「この間の騒ぎがうまく治まりましてのう」
「この間の騒ぎ」
ぼくはしばらくは分らなかった。そしてやっと気がついた。
「ああ、あの大蔵大臣の公金拐帯騒ぎですか」
「あれも政権交替の一つの動きだったとです。新しい政府が誕生したもんでの、首都でその新政府の式典が行われることになりましてのう。あの国では、花が一ぺんにはようけ作れませんので、大量の注文が来たですたい。明日船に一杯パレードの飾り用の花をば積みこんで、河を溯るのですがの、あんた一緒に行ってみませんかのう」
「そいつは面白そうですね」
「悪かけれど、向うでわしの仕事を少し手伝ってくれると助かるですたい。わしはまだスペイン語ようでけんのでね。日本語で交渉一切をやりますたい。向うの国も日本人が多くいる所ですから日本語でやるつもりなら間に合うのですが、それだと今度は息子らを連れていっても、役にたたんのですたい。誰も日本語を、もうまるでしゃべれんでのう。仕事は何も大したことはなかですよ。船から下ろしてトラックに移したら終りですたい。飾りつけは向うの方がやるとです。届けたら、私も一週間か十日ばかり向うの国で遊んでこようと思っておりますたい。あんたもゆっくりと見物しなさらんかの」
ぼくには内乱騒ぎが心配であった。射たれたら困る。
「それでもうドンパチはないんですか」

「ああ、すっかり終ってしもうたとです。その意味じゃ危かことは何もありません」
「そりゃ、ありがたい。ぜひ連れていってください」
そんなことでもなければ、ラ・プラタ河の源流の、四方を山に囲まれた小さい国へわざわざ行くことなど、永久になかったかもしれない。中米では随分小さい国を沢山見てきたが、人口からいえば、これから行こうとするその国より小さい国は他にはなかった。山の中に気儘に住むインディオをまぜて、推定がやっと百八十万人で、たしかに、国民として判明している人間のみに限定すると百六十万を切るという国だそうだ。
翌日の昼、港の桟橋で待ち合せたぼくたちは、平底の外輪船に乗って出航した。ゆるやかな大河を上流に向って行く旅は、いかにも旅という名にふさわしい旅情の濃いものであった。
ぼくが一緒についてきてくれたのが、よほど嬉しかったのか、北九州出身の花屋の老人は、船ばたにあぐらをかいて、すぐにピーノ酒をあけながら大声でしゃべりつづけた。
「何せの、この河は、中にすっぽり日本列島がおさまるといわれるぐらい大きいですたい」
たしかに首を回しても両方の岸が見えないほどに広い。しかし、日本の島が入ってしまうというのは、いくら何でも大げさに思えた。
「まさか、そんなに大きいことはないでしょう」
ピーノのコップを受けながら、ぼくは少し遠慮がちに、それでも正確なことを知りたいので敢えてそういってみた。向うも急にてれくさそうにしながら答えた。
「いやまあ、それは、河が洪水で氾濫したときのことですたい。みるみる周りに水が広がって、日本列島を飲みこむほどになってしまうとのことですたい。ふだんは、それほどじゃなかようです」
船は、船室も甲板も、バケツの水につけた花と、切って積んである花で一杯で、匂いにむせそうで

あった。あまりに強すぎて馴れないぼくの胸はむかついてくる。酒でも飲んでいなければ、息苦しくなる。

丸三日間、昼は甲板に坐りこんで、ピーノのコップをずっとやりとりして過ごした。

三日目の昼に小さな国の首都の港に入った。

このあたりは十一月は増水期であるというので、河の水量が多い。港には一千噸クラスの外航用汽船が、何艘も碇泊していた。この河港が、空港を除けば、この小さな国では唯一つの外国に向って開いた口で、外国から来た人も出て行く国民も殆どの人が、この港を利用する。山に囲まれた内陸国なので、物資は少ない。国民の生活はすべて輸入に頼っている。港は活潑に動いていた。

大きい船の間を通り抜けるようにして、外輪の平底船は港に入って行った。

岸の船着き場には、もう迎えの人が待っていた。その中に一人、色が黒くて背が高い若い男がいた。この男は花屋の老人と握手するとき、上手な日本語を使った。彼が指示すると集まってきたトラックに、花はどんどん移されて行き、船は見る間に空になった。ぼくが手伝ってやるような仕事は、ここへ着いても一つもなかった。老人はただ三日の船旅が退屈なので、連れて来てくれたらしい。

港の近くの、桟橋がよく見えるコーヒーハウスで話していた花屋の老人は、ぼくのことをその日本語の上手な大柄の青年に、

「日本からやってきた、作家の人ですたい」

といって紹介してくれた。

「そうですか。それはいい人にお逢いしました。ぜひ、明日から行われる、新政府樹立のパレードを見てください」

青年は達者な日本語でいうと、手をさしのべてしっかり握手した。

「ええ、それが楽しみでやってきました。ぜひ見せてください」
「それでは、お二人のためにいい席を用意しておきましょう。大統領閣下のお顔がよく見れる席を。ああそれから式が終ったら、ぼくらは、もう暇になりますから、ついでにぼくの家でゆっくりしていって、ぼくらの話もきいてくれませんか。面白い物語ができますよ」
かつて向うからそう言われて、本当に面白い話にぶつかったことはない。少しわずらわしい気がしないでもなかったが、しかし何でも見て、何でも聞いて、何でも首をつっこもう。どうせ、先は大して長くないのだから。
ぼくはそう思った。
首都の空は青い。ここは山地で涼しい。ヴェノスアイレスよりも過ごしよさそうであった。こんな機会は滅多にあるものではない。
「それでは、そちらのお時間に邪魔にならない限り、ゆっくり話をきかせてもらうことにしましょう。いい物語が書けるかもしれませんな」
これでまたしばらく無料で泊れるかもしれない。もう、旅費の乏しいぼくは、心いやしくなっている。素早く胸のうちで計算しながら相手の喜びそうな言葉を探して答えた。
式典は華麗なパレードを中心に丸一日行われて無事に終った。
青年は、その間花屋とぼくの宿所を世話してくれた。パレードにはいい席も用意してくれ、式の間は、至れりつくせりの待遇をしてくれた。それに式典を見物して分ったことだが、ぼくが単に会場係の主任ぐらいに思っていたその青年はこの国ではかなり重要な地位にいる人物であるらしかった。パレードのときは、大統領の立った壇上にたち、大統領のすぐ後ろで一緒に国民の祝福を受けていた。
そのパレードの後で、初めてぼくは思い出したのだが、どうもこの青年の顔に見覚えがあるような

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com